

定家記した超新星 1000年後の姿 京大理研が画像公開

藤原定家の日記「明月記」に記され、人類の記録上最も明るく輝いたとされる超新星「SN1006」の出現から、5月1日で1000年を迎えるのに合わせ、京都大理学研究科の小山勝二教授らのグループが、昨年7月に打ち上げられたエックス線天文衛星「すざく」でとらえたSN1006の最新画像を公開した。

超新星は大質量の恒星が最後に迎える大爆発。SN1006は「おおかみ座」の方向に出現し、明月記では過去の天文現象を記したなかに、「寛弘3年4月2日癸酉（1006年5月1日）夜以降 騎官（古代中国の星座名）中有 大客星（超新星）」とあり、出現の日を記した文献として世界的に知られている。

爆発で噴出したガスは宇宙空間を広がり続けており、小山教授らは、爆発から1000年後の超新星の姿を高精度のエックス線画像でとらえた。電離した酸素原子が放つエックス線の画像では、200万度の超高温プラズマが、直径六光年を超える巨大な火の玉に成長した姿がはっきりと見えた。

小山教授は「世界に誇るべき天文記録が京都で記され、1000年のときを超えて最先端の研究が日本で行われていることを知ってほしい」と話している。12月には京都で「すざく」の観測成果を報告する国際会議が開かれ、SN1006の特別セッションもある。